雜載

べいとつかへべい〳〵と呼あるき、專ら盛になりしは、寶曆九年の頃なりといへり、此說おぼつかなし、其磧が色三線大坂の卷、傾城買が落ぶれたる事をいふ處、茶碗燒出す高原といふ處に、風の神と相住して、風の神とは、風神送り、といふ物もらひなり、新町の名ある大夫、天神の姿を紙のぼりに畫き、其身は古き破あみ笠を著て、端々をもつて廻り、さあ〳〵丹波屋の小ざつま、明石やのもろこし云々、古釘にかへましやう〳〵と子供たらして其日を送りける、本朝文鑑左角が地黃煎解に、此ごろの人の覺えたがひて覗からくりのあしらひと思ひ、古がね買のきせるの雁首とかゆる、又伊呂芝居に、きせる皿ひとつにもかへてもらひにくき、しろものとも見えたり、

〔倭訓栞前編二〕あめ　あめうりのふえを吹事は、古く西土より傳はれり、詩箋に簫編小竹管如今賣餳者所吹也と見えたり、

〔延喜式三十三大膳〕仁王經齋會供養料

僧一口別、○中略糖三合六勺、菓餅料二合、好物料五勺、海菜料七勺、生菜料一勺、索餅料三勺、

〔延喜式三十三大膳〕年料

糖十斛八斗九升四合六勺、御井中宮各一斛六斗八升三合、東宮一斛六斗七升八合八勺、雜給五石八斗四升九合八勺、絹篩九口、別三尺絞糖布袋十二口、別四尺

〔延喜式三十九內膳〕供御月料

糖一斗四升二合五勺○中略右月料、小月減卅分之一、

〔東大寺正倉院文書二十九〕但馬國天平九年正稅帳

正月十四日讀經供養料充稻伍拾貳束玖把○中略

糟○朱書云阿米料米壹升充稻貳把

〔本朝食鑑穀〕飴